

開催地名：千葉県長生村	
開催日時	令和元年 10 月 20 日（日） 10：20 ～ 11：45
開催場所	長生村役場
語り部	田代 賢司 （千葉県富里市）
参加者	消防団 73 名
開催経緯	本村では南海トラフ地震、首都直下地震による地震・津波の被害が想定されており、津波避難施設建設をはじめ、災害対策を推進しているところである。過去においても、延宝、元禄地震による津波の被害で多くの人命が失われており、東日本大震災を教訓として、津波避難についての意識向上を図りたい。
内容	（１） 震災後の凄惨な現状について 東日本大震災が起こり、自分も何かしなければと感じた。すぐに車で駆けつけようとしたが、道路は波打ち、がれきが山をなし、車では被災地にたどり着けない状況を知った。結局、ボランティアに行くことができたのは 9 月である。同僚 8 人で、宮城県でのボランティア活動を行った。初めてのボランティアで私は宮城県東松島市に行った。担当したのは、流された養殖用のいかだを作る作業である。とても疲れたが、現地では人手が足りないということを実感した。 2 回目に行ったのは石巻市北上地区である。この地区は海から離れた内陸部であるが、津波が北上川を遡上してきて川沿いの低地を中心に 200 名を超す被害者が出た。住民は、まさかここまで津波が及ぶとは考えていなかったようだ。同じ石巻市で多くの犠牲者を出した大川小学校は、学校の屋根が堤防と同程度の高さしかない低地であった。このときのボランティアでは、小さな神社の境内の草取りをした。1 メートルほど伸びた草を引き抜くのは重労働であったが、地区代表の高齢男性が涙ながらにお礼を言ってくださり、ボランティア活動を続けようと心に誓った。 （２） 自助・公助について 住民の避難、誘導について（水害、土砂災害からの避難のあり方）は、公助の面（行政指導、ハード対策、ソフト対策等）には限界がある。従って、住民主体の防災対策に転換していく必要がある。目指すべき社会は、住民が「自らの命は自らを守る」という意識をもち、自らの判断で避難行動をとり、行政はそれを支援する社会である。住民の側では、避難勧告が出ていなくても危険と判断したら自主的に避難することが重要である。 東日本大震災で多くの犠牲者が出た要因は、想像を超えた津波、対応力を超えた任務、情報の不足、地域住民の防災意識の不足が挙げられる。これらの要因から、今後の取り組むべき方向性を整理すると、監視観測体制の強化、津波警報の改善、

水門等の廃止、遠隔操作化、安全装備の充実、退避ルールの確立、安全管理に関する訓練の充実、そして地域の総合的な防災力の向上が急務である。

(3) 避難ルート確認の重要性について

「釜石の奇跡」で有名な片田敏孝教授（群馬大学名誉教授・東京大学特任教授）は、岩手県釜石市の小・中学校で8年間防災教育に関わった。そこで徹底したことは、「どんな津波が来ても、できることは逃げる事」である。想定にとらわれずに、危険を感じたらとにかく逃げる事、そして自分の命を守り抜く事に専念することが重要である。今回の津波でも、大声を出しながら全力で駆け出した中学生たちが、児童を巻き込み、大挙避難する彼らの姿を見て、住民の多くも避難を始め、3,000名の命が守られた。

また、マニュアルに定める事項として、消防団員の命を守ることが最優先でなければならない点についても言及したい。退避ルールの設定が極めて重要だと考える。



開催地より

東日本大震災のボランティアの経験談とともに、釜石の奇跡（片岡敏孝教授の避難の三原則）についてのお話を詳しく伺うことができた。自主防災組織の推進、普及に役立てたいと思う。